鳥取の民話

69

収録・解説　酒井董美（ただよし）

語り手　片桐利喜さん（明治30年生まれ）
昭和61年8月4日収録

地名も出てくる伯耆型

鶴の恩返し

（西伯郡大山町高橋）

イラスト・福本隆男

あらすじ

昔、ばあさんが綿を引いて2反ずつ木綿をこしらえ、じいさんが淀江に持って行って売り、1反分で米を買って1反分は綿を買って暮らしていた。

ある日、じいさんが買いに行かれたところ、晩（ばん）田（だ）の堤のそばの罠（わな）に鳥がかかってもがいている。

「おら、木綿負っちょうから、この木綿一反掛けとけば、罠掛けた者も喜ぶし、鳥も喜ぶ」。そのようにしたら、喜（よろこ）んで鳥が発（た）って行った。

じいさんは米だけ買って帰り、話したら「ええことしちゃりはった」とおばあさんも言っておられた。

ふたりが夕飯を食べていたら、女の人が入って来た。「道に迷って暗くなっていぬるとこが分からんが、今夜泊めてごしなはらんか」と言う。

「なんぼなと泊まらはらいいだども、家には米だし何だしあれへんだが」「米は持っちょうます。鍋一つ貸してごしなはい」。紙袋から米を出しご飯を炊いて「おふたりとも食いなはい」と、ご飯をふたりにも食べさした。「久しぶりで米の飯、食った」とふたりは喜んだ。

明くる朝、ひどい雨なので、女の人は「2、3日、宿してつかわはらんか」。「なんぼでも泊まらはってもいいでよ」とおじいさんやおばあさんも言った。

女の人は「表（座敷）を、ひとつ貸してつかあはい。2日、3日、戸だい何だい開けずとおってごしなはい」と表の間に入っていった。

「何すうだらか」と戸の節穴からのぞいたら、鳥が毛を抜いて機を織っていた。「罠に掛かっちょった鳥だ」とじいさんは言った。

女の人は3日目にできあがった木綿を持って出て来て「これ、木綿買いさんとこで売って来てごしなはい」と、そのまま鳥になって発って行ってしまった。

じいさんは淀江の木綿買いさんのところへ行ったら「わが手に合わぬ。松江の殿さんとこに持って行きてみい。ええ値段で買ってもらわれえ」と言われたので、松江の殿さんのところへ持って行ったら、殿さんは「これは鶴の羽衣だ。これがほしかったに、持って来うもんがないだけん、買あやがなかった」とたくさんお金をくださった。

ふたりは休んでいても食べられるようになって、後でとても喜びなさったそうな。

その昔、こんぽち。

解説

おなじみの「鶴の恩返し」の伯耆型の昔話である。そしてこれは親切で欲のない老夫婦の善意が、思いがけなくも幸運を呼び込むという結果になっている。淀江や松江と地名が出ているのもおもしろい。

関敬吾博士の『日本昔話大成』では本格昔話の「二、婚姻・異類女房」の中に「鶴女房」として位置を占めているのである。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。